その一　広島文教女子大学

国文学科

国文学科の開設は文学部創設と同時で、昭和四十一年四月である。学科開設期に、その基盤作りに精魂を傾注された教官も、今では現職を離れ、転任され、（山内洋一郎（奈良教育大学）槇林滉二（佐賀大学）早川勝広（大阪教育大学）などの先生方）、中には長逝された方（山根安太郎・園田均・原田虎男の各先生方）もあって、当時の苦労を知る人はまことにわずかになった。十七年の歳月はそのように重いものであったということである。

先人たちの苦労の甲斐があって、学科の姿はしっかりと定まり、内容はいよいよ充実した。卒業生も数百名を数え、多くの人がそれぞれの世界で社会に貢献している。創成時代も過ぎて、大学全体の新しい発展期を迎えた今日、本学科もまた一段の飛躍すべき時がきたようである。

学科の基本姿勢　学生の数をあまり多くしないで、一人ひとりに行き届いた指導・助言をするというのは、本学の基本姿勢で、国文学科もその方針を堅持し続けてきた。教員組織も、専任十一名、非常勤十名程度で、これは短期大学部も併せた数であるが、それでも教員一名当たりの学生数は決して多くない。数の問題だけでなく、教員自身も常に第一線の研究者でなければならないと考えて精進を続けてきた。学生諸君に、常に高い水準の学問に接

してもらうようにするのが、われわれの責任である。

カリキュラムの面からいえば、専門学科に接する時期を早くして、一、二年にすでにかなりの専門科目を配している。この期間に学生が受講しうる専門科目は十五講座に及び、三年次生ではすでに一応の研究姿勢ができていることになる。細かい点では、まだ改善の余地があろうが、この基本姿勢は堅持してゆくつもりである。

学生の動向

国文学科入学生の出身地も広範囲になった。地元の広島県はいうまでもないが、隣接県である山口・島根など、中国地方の諸県、愛媛県を主とする四国諸県は、当初から入学者の多かった地域である。近年は、大分・佐賀・福岡・長崎・熊本・宮崎というように、九州諸県の出身者も増えてきた。西日本全域に及ぶようになったわけで、なお、近畿・関東・北陸の諸地方からも、少数ながら入学者が出ている。

女子学生は卒業すると親元に帰ってゆく者が多い。そういう人のために、卒業後の活躍の場を開拓してゆくことも必要なことであるが、必ずしも十全の態勢がとられているとはいいがたい。これは早急に整備する必要がある。

卒業生の進路であるが、教員・公務員を目ざす者が多く、教員も高等学校・中学校だけでなく、卒業後に小学校教員の資格を身につけて、その方面で活躍する者も増加しつつある。

指導の状況

どのクラスにも主任がついていて、学生生活全般にわたって細かい指導・助言が行われているが、日々の講義・演習とは別に、研究という面からいえば、さらに二つの柱がある。その一つは卒業論文指導で、もう一つは研究会活動である。

卒業論文は、学科開設当初から分量としては百枚を下限としてきた。分量が全てではないが、やや厳しい量を目途として、それに向かって全力を傾注してゆくという仕事は、どうしても必要である。現在は三年次から指導を始めているが、論文作成という難事業に当たっては、学生の学力だけでなく、個人的なさまざまな問題がからんでくる。指

導を担当する者は、論文だけでなく、生活のいろいろな面に踏み込んで助言を行うことになる。もっとも大切な教育の場ということができる。

研究会活動は、もともと学生の自主的な研究活動の会であるが、教員の指導・助言は不可欠である。近年はその数も増えて、漢詩・中国語・中古文学・中世文学・近代小説・近代詩・児童文学・方言・児童言語など、各方面で活発な研究活動が行われている。このような活動は、国文学科生全員が参加できることが望ましいが、現状はそこまでいっていない。今後、研究室・ゼミナール室の整備も必要であろうし、一年次生から四年次生まで参加できるためには、時間割の組み方を効果的にすることも考慮しなければならない。また将来の方向としては、他学科生をも受け入れるような、開かれた会を持ちたいと考えている。

図書整備の方向　古代から現代まで、国文学科の必要とする図書は極めて膨大な量に上る。近年、図書館の相互利用が盛んになってきたのは、一大学が必要図書を全て確保するのは不可能だという反省に基づいているが、国文学科にとっては、図書は生命である。日常の学習・研究活動を支えるだけのものは必要である。と同時に、特色のある集書を備え、学生の研究活動に資すると共に、広く学界を益することも責務である。古書の入手と併行して、マイクロフィルム化された文庫資料の購入整備を心がけて数年が経った。まだまだ不十分であるが、近年、伊賀上野の沖森氏の蒐集になる浄瑠璃本を購入することなど、一歩ずつではあるが前進している。また四十六年度から、『広島の文学』文庫と称して、郷土にかかわりのある文学資料を、古今を問わず集めようと志している。長年月を要する仕事で、次の世代がこれを引継いでくれることを期待しているが、ゆくゆくは、山陽・山陰全域を対象とする文庫を作りあげたいと念願している。

国文学会　一つの学科が長い歴史を作ってゆくということは、卒業生が多くなるということである。大学は、そ

の人たちの母港としての役割を果さなければならないし、卒業生の力に支えられることによって、大学もまた発展するのである。

『広島文教女子大学国文学会』ができたのは、昭和四十八年十一月九日であった。

〃国語国文学の研究の充実と発展を期し、あわせて、会員相互の親睦を深めることを目的とする〃

と、その会則第二条にうたっている。年一回の総会と講演会が持たれ、機関誌である『文教国文学』も、すでに十二号を数えて、その掲載論文も学界でしばしば取り上げられてきた。所期の目的は達せられつつあるが、卒業生会員の論文発表は必ずしも多くない。今後は、より広い参加と利用とを求めて、雑誌の充実を図ってゆくことが必要であろう。

学会ではまた、会員の研究成果の刊行という活動を行っている。すでに次の三点の刊行を見た。

○国語学国文学論攷　岩佐正教授古稀記念　昭和五十三年十二月二十日刊　渓水社

○中等国語教育論考　山根安太郎著　昭和五十五年五月二十日刊　渓水社

○漢語漢文の世界　三迫初男博士古稀記念　昭和五十八年二月十日刊　渓水社

さて、国文学科の十七年の歩みを概観してみると、工夫と努力の連続の日々であったように思う。大学全体の人々の力に支えられて、今日の国文学科の姿ができたのだと思う。多くの課題を抱えてはいるが、われわれもさらに精魂を傾注して、学科の発展に努めていきたいと思う。

（文責・湯之上早苗）

英文学科

文学部英文学科の開設は、昭和四十一年四月である。

浅地教授のこと　まず、文学部英文学科について記す時に、何はおいても、いの一番に語らねばならないのは、故浅地昇先生のことである。浅地先生は文学部開設の前年の十月に、四国女子短大に勤務しておられたのを、筆者が広島高師在学中に教わったご縁をたよりに、先生のご子息の一人が広島に住んでおられることと、当時同じ四国女子短大に在職されていた友久武文氏（現広島女子大学教授）と本学の横山教務部長が熟知の間柄であったという二つの幸運が重なって、このような折の時に出会う難儀を、なんら経験することなく、まことにスンナリと当時の可部女子短期大学へ転勤していただいて、文学部英文学科開設のかなめになっていただくことができた。

先生は大正十五年から昭和十七年まで、日本ルーテル神学専門学校教授として、英語、哲学、神学等を教えておられた。太平洋戦争の勃発（昭和十六年十二月）とともに、広島高師英文科の二人の外国人講師（非常勤）が退任の余儀なきに至った時、大正年間に三年間米国に遊学されて口語英語にもご堪能であるのを買われて、その後任として広島へ来られたのである。戦後は文部省に招かれ、渉外課に三年間ご勤務ののち、昭和二十五年より昭和三十四年まで、徳島大学教授の任にあられたというご経歴である。先生の人となりについて一言でいえば、真摯・謹厳・廉直のピューリタンということになろうか。先生のご生涯について詳しいことは、いずれ稿を改めて語ることになろうから、ここでは、広島文教通信の第四号（昭和四十五年三月一日号）に寄せられた先生ご自身の自己紹介の一文「私の

歩いた道」の中の一節を、引用させていただくにとどめたい。

要するに私の一生の仕事はかのスピノーザと同様、生涯眼鏡の球（レンズ）磨工なのである。人の魂を磨く事以外には私の仕事はない。されば彼と同様「永遠の相」に於て一切を眺めているから私には冨貴功名は浮雲の如く超然として諦観に徹し、小さい乍ら天与の賜物を活かしてたとえ一握の人々の為にも全力を投球して奉仕し、今日も明日もいそしみ励んで命の限り健康の許す限り斯の途を歩いて行く積りで居る。

佐川教授のこと　後程紹介するように、文学部開設時のスタッフには、佐川春水先生の御名前がある。松江の方である。研究社刊の『日本の英学百年』別巻（一八〇頁）によると、「大正九年日進英語学校を創設。昭和一九年まで校長であった。雑誌『英語之日本』（明治四一――大正六）主幹。昭和二〇年戦災を受けて松江に帰り、島根大学英文学講師を勤め、雨人と号して俳壇の指導者でもあった。文筆にすぐれ、誤訳指摘や入試問題批判はしばしば評判となった。」とある。また同書昭和篇（四四六頁）によると、「佐川春水主筆の『日進英語』が日進英語学校から発行され、佐川が頂光生というペンネームで「放送英語月旦」を書き、当時のラジオ講座担当者の心胆を寒からしめた」とある。多分、戦前・戦中の日本の大学人の中で、英語の実力という点において指折り数えてあげて行くとすれば、必ずや先生のお名前が浮かんできたのではないかと、筆者は想像している。とにかく、抜群に英語のできる方であった。

その佐川先生にわが英文学科開設時のスタッフの一人として名前を連ねていただくのに、随分と無理なお願いをした。結局、先生には実際には教壇に立っていただけないで昭和四十三年に病歿されたが、学科創設に参画した一人としては、英文学科の開設における先生のご貢献を、決して忘れることはできない。特に小文を草して、感謝のまことを捧げるゆえんである。

開設準備着手から認可決定まで

文学部英文学科の創設についても、短大の場合と同様、田辺昌美氏（広島大学）の強力な後援に助けていただいた。重ねて、なくなった先生に衷心感謝のまことを捧げたい。

当時についての筆者の記憶が少しおぼろになって、準備に取りかかった時期がハッキリしないのだが、多分早くても、昭和四十年度が始まってからであったように思う。そして短期大学英文科の場合は学科増であったが、文学部の場合は、新しい四年制大学の設立であるから、中央の係官を迎えての現地審査も行われ、状況は短大の場合に比べて、なにかと厳しいものがあった。

われわれ英文科の教員としてもっとも苦労したのは、図書の購入とその整理とであった。なにしろ夥しい数の図書を選択し、購入し、これを現地審査の日までに分類し整理して、書架に陳列しなければならない。当時、英文学科関係の図書として、およそ何冊を購入したか正確な記録が残っていない。この時の当大学設置認可申請書には、文学部全体で初年度の図書一万冊という数字が記載されているが、これを国文、英文、一般教養でどのように分けたかは、はっきりしない。発足したばかりの短大英文科のスタッフである小田助教授、直野講師（いずれも当時）と筆者の三人でこの仕事にあたったが、夏休暇の大半をこれに割いたように記憶している。それでもなお審査の日に間に合いにくいと思えたので、入学してきたばかりの短大英文科の一期生の諸君に、頻繁にカードの整理を手伝ってもらったりした。皆で力を合わせ、随分骨を折った。だから現地審査が終って、視察官の批評もおだやかなトーンであったことを聞いた時、心底安堵し、そして快い疲労を感じた。

教育目標ならびにカリキュラム

新設学科の教育目標としては、もちろん短大英文科の場合と同様、学長先生の建学の精神をその中心に据えて考慮をめぐらしたが、四年制大学であるから、短大の場合よりもアカデミズムの色合いのより濃い目標となるのは、当然のことであった。さきに述べた浅地教授は学科開設の辞として次のよ

うに記されている（開設年度の入学案内参照）。

円満明朗なる人間形成のため全分野に亘る高度の人文教育を施すと共に、英米の語学・文学を専攻することにより西欧文化の認識を深め、日本女性として豊かなる知性、気品ある徳性、優雅なる情操を備えさせ、更に外国語を実際に用いる職業人をも育成することを目的とする。

このような学科の目標を達成するため、出発にあたって構成された英文学科の専門科目のカリキュラムは、やや盛り沢山であった。この、学科発足の時に定められたカリキュラムは、昭和四十四年四月の司書・司書教諭養成課程の開設の折、その他の機会に、多少の変更が加えられながら今日に及んでいるが、前述した根本の教育目標は、一貫して変わらないわけであるから、大筋の変更はなかったといってよい。

カリキュラムに沿って日々の教育が続けられてきたのに加えて、これは何も当学科だけの専売特許ではなく、最近は他大学においても珍しくなくなっていることであるが、当学科でも所謂ゼミナールがいくつか開設されている。これはいうまでもなく、普通の講義で学生がとかく陥りがちな受け身の消極的な姿勢から抜け出して、積極的に学問を目ざし、問題に取り組む意欲を養わさせようとする意図から出たものである。五十八年度も、五つのゼミナールが開かれて、熱心な学問研究活動が続けられている。

教授陣容　先に述べた浅地教授を柱にして、昭和四十一年四月、文学部の英文学科が発足した時以来の教授陣容の構成は、本三十五周年記念誌の巻末にある名簿を参照されたいが、その後実質的に年々充実してきており、教育内容の拡充がはかられている。

専門科目の講義ならびに演習　これについては、表にしてまとめ得るような、過去十八年間を網羅する正確なリストが残念ながらない。そこでここでは、昭和四十六年度および昭和五十七年度の専任教官の講義演習につ

いて、一人につきそれぞれ代表的な一科目の内容を紹介するにとどめよう。これによって、わが英文学科の具体的な授業内容のおおよその傾向は、十分とはいえぬまでも大略紹介し得るのではないかと思う。

ア、昭和四十六年度（広島文教通信七・八号所載の文学部講義題目摘録による。）

教官名	授業科目名	授業内容
浅地　昇	（思想史）	「思想史」といわず「世界宗教哲学思想史」といえば幾分内容がわかる。〔前期〕はギリシア密儀教から始めて一般哲学史に及び、ペルシア印度の古代宗教から仏教、キリスト教を概説し、スコラ哲学を経て十字軍で終わる。〔後期〕はルネサンスから宗教改革、カントを経て「実存哲学」に及ぶ。四年次生を対象に要点を筆記させる所謂講義学科。
古川尚雄	（文学概論）	文学概論、これは「私の文学概論」というほかはない。文学のように範囲が広くて、目標がハッキリしないものは、そうなりがちである。しかし、それなりに現代における文学の意味を適確にとらえ理解することに主眼をおいている。文学を突き詰めると、人間の根元的活動になるが、その現われ方はいろいろである。しかし結局は、人間性の表現と把握という点では変わりがない。現代は、新しい人間性が育ちつつあり、育つべき時である。その立場で文学を見直す、それが「私の文学概論」である。
小川　登	（英作文　I）	授業は和文英訳を中心に進めているが、いつの場合も必ず前の時間に作った英文の暗誦（五、六名を指名）から始め、暗誦中に発見した発音上の誤りについて、五ないし十分程度個人練習を行う。当該時間の新しい練習問題は、次々に指名して、口頭作文により進めて行く。最後に、その時間にできあがったすべての英文を板書させて学生の聞き違いを訂正し、問題点について再度注意を促して終わりである。
小田　忠	（英米文学作品研究I）	英米現代詩の研究。イギリス、アメリカの現代詩七十篇あまり。詩的な言語――想像力の言語――にふれることで、象徴的な思考や暗喩的な認識の仕方のいろいろな可能性を体験すること、また構築された言語表現をよくながめることで、形相的な知覚を純粋にし、深めること

		とができるだろう。
中川厚武	（英米文学作品研究Ⅱ）	三年次生対象。短編小説の読み方をテーマとして、その定義から始めて、形態・歴史を考察し、次いでJ・カーカップの Aspects of the Short Story をテキストに用いて収録された六編の作品を精読し、内容を討議させ、短編小説の鑑賞・批評の方法を会得させる。
中川和子	（英文学講読）	二年次生を対象に、英文学の一つの特色となっている児童文学を取り上げて読んでいる。作品はC・S・ルイスのキリスト教思想に基づく雄大な構想のファンタジー「ナルニア国物語」の第一作 The Lion, the Witch and the Wardrobe である。おもしろい筋や童話らしい雰囲気を楽しむと共に、平易で美しい文体に注意させ、背景となる思想を解説し、関連した聖書の英文も参照にしながら読んでいく。
松本博之	（英文法概説）	言語の基底構造を、チョムスキーのいうように「文」に置き、英語の統語法を把握する目的で、吉川美夫・道夫共著「英文法　Ⅰ文篇」（松栢社）と、ホンビー著「英語の型と正用法」をテキストとし併用し、課外レポートにイエスペルセンの「エッセンシャル英文法」「カーム英文法——原理と実践」、アニアンズの「高等英文法——統語論」、吉川美夫著「英文法詳説」を課している。

イ、昭和五十七年度

関本至	（言語学概論）	言語研究の歴史、世界の諸言語の分類、言語の本質、言語社会、言語の構造、等について概説する。
竹内正三	（英米国史）	一五世紀から二〇世紀までの五〇〇年間のイギリス社会の発展を概観する。授業は講読、演習の形式。テキストはシーマンのイギリス社会史、ロングマンズのシリーズの一冊。
小川登	（英語科教育法Ⅰ、Ⅱ）	M. Finocchiaro 著「English as A Second Language」（プリント使用）を読みながら、外国語教授法の歴史を回顧し、すぐれた英語の授業はどのようにあるべきかをさぐる。

小田　忠	（英文学概論）	1　作品の概念について。 2　作品研究の方法の実際。 3　読書法――文章解釈法――の演習。 4　テクスト――ラーナー「英文学」（英文）英宝社
中川厚武	（英米文学史）	各時代の文学の主要な傾向・特色を、できるだけ個々の作家・作品と関連させて取扱う。英文学の発展をこのように跡づけていくことにより、伝統への目を育てたい。
中木文人	（英文学講読Ⅳ）	The Moon and Sixpence by W.S. Maugham　金星堂　七五〇円 モームの長篇小説を楽しく読み、速読に慣れさせたい。
松本博之	（英語学演習Ⅱ）	David Lodge の The Language of Fiction を使って、小説の言語の特徴を研究する。
村上勝也	（ラテン語）	ラテン語文法の概略を講じ、将来のラテン文解読に備える。英文科の学生が対象なので、特に英語と関連させつつ、文法、語源を扱う。
A・B・オドナフュー	（英会話Ⅰ）	今日の世界におけるさまざまの発話場面に対処するに際しての、適応性を与えることのできるような基礎的英語能力を育成し、かつ吟味することを目指す。教材は Modern English, An Oral Approach
志鷹道明	（英米文学作品研究Ⅱ）	C. Dickens: David Copperfield（研究社英文叢書）Vol. 1 を語学ならびに文学の両面から精読する。
吉井浩司郎	（英文学講読Ⅰ）	テクスト："Daughters of the Vicar and the Shades of Spring" by D.H. Lawrence（研究社）テクスト精読のほかに、Ⅰ期・Ⅱ期通して、課題図書十冊の本それぞれについて読書感想文の提出を求める。

教員の海外研修　この件については、本学ではまだ一定の制度が定められるまでに至っていないが、学科の創設以来、今日までのところ、次の三名のものが短期および長期の海外研修に出かけ、それぞれ相当な成果をお

さめて帰国した。留学先および研究テーマを列記して、記録にとどめておく。

教員名（研修時の職名）	研修先	研修期間	主要研究テーマ
小川　登（助教授）	英国、オランダ、デンマーク	自四十四年七月至四十四年十一月	外国語としての英語の教育の理論と実際
松本博之（講師）	英国（オックスフォード大学マートン・カレッジ）	自五十一年八月至五十二年八月	中世英語頭韻詩の語彙研究
中川厚武（教授）	英国（ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ）	自五十二年七月至五十三年七月	十九世紀英国小説の研究

研究業績

英文学科に所属する各教員は、日々の教育活動に真摯に取り組む一方、それぞれの研究テーマを持ち、その研究の充実深化に向かって日夜余念がない事はいうまでもない。その成果は、毎年一回発刊される本学の紀要はもちろんのこと、各自の所属する各種学会や研究会等における、数多くの口頭発表や刊行論文となって結実している。ここでは、その中から単行本としてまとめられたもののみを昭和五十年以降に発表されたものに限って、発表の順序で紹介するにとどめたい。

著訳者名	書名	出版社名（出版年月）	内容
浅地昇	Kadensho, a secret book of Noh art by Zeami	ユニオンサービス社（昭和五十年）	今から約六百年前に、能楽の大成者世阿弥元清によって書かれた、能芸の理論と実践を教えた秘伝書を、英訳したもの
竹内正三	西洋中世の世界	学生社（昭和五十二年三月）	東西文化の比較を視座として、西洋中世の社会の発展を考察した大著
小田忠	キャサリン・マンスフィールド『想像力	あぽろん社	マンスフィールドの文章表現のイメージ的志向を分析することにより、その精妙な文学の解明を試みており、マンスフィールドの文章

	の世界』――イメージ研究――	（昭和五十四年七月）	の神秘的魅力の裏に「人間の実存――『生きる』――の精緻な構造分析」のあることが論証されている。
関本　至	現代ギリシア短編小説選集	渓水社（昭和五十五年七月）	一九三〇～四〇年代を中心に活躍した現代ギリシアの代表的な作家たちのなかから十三人、合計十九編の短編小説が、原本からの直接訳でのせられている。
古川尚雄	英独比較語学	渓水社（昭和五十七年三月）	同じゲルマン語派に属しながら互に異なる道を辿ってきた英独両言語の発展のあとを、それぞれの民族の歴史を背景としながら、互に対比せしめつつ、如実に描き出したもの。古代、中世、近・現代と時代を追い、音韻論、形態論、文章論の各面にわたり、英独両言語の特徴、両言語の類似性と相異性などを実例に即しつつ克明に叙述した内容となっている。

最後に挙げた故古川教授の論考は、教授の未出版の原稿を、原稿の整理、校訂や補整の仕事の上で多くの困難に出会いながら、関本教授を中心とする英文学科の全員の協力で、出版にこぎつけたものである。当時、朝日新聞と中国新聞の両紙が、大きく紙面を割いてこの事業を一般に紹介してくれた。なお、以上各書の内容についての記述は、著者自身から筆者に手渡されたメモの内容、または「広島文教通信」のそれぞれの号に載せられた各著書の紹介記事の文章に依拠した。

以上はすべて単著であるが、この他に本学教官と他大学の研究者との共著になる二つの訳書が、最近相次いで出版の運びにいたった。共に本邦初訳である。

訳者名	原著書名（原作者名）	出版社名（出版年月）	共訳者名	備考
志鷹道明	憑かれた男（ディケンズ）	あぽろん社（昭和五十七年三月）	藤本隆康氏（甲南女子大学）篠田昭夫氏（安田女子大学）	
中川厚武 松本博之 吉井浩司郎	無商旅人（ディケンズ）	篠崎書林（昭和五十七年十一月）	湯浅信之氏（広島大学）他三十二氏	広島大学英国小説研究会の名で刊行された。

また関本教授の古稀の御祝いを記念しての論文集が、今年（昭和五十八年）の五月に、渓水社より刊行された。題して『言語学論叢』という。本学英文学科関係の執筆者は、小田忠、松本博之、村上勝也の諸氏である。なお、これは新著ではないが、竹内正三教授著の「暗黒時代の精神史」（吉川弘文館発行）の再版が、昭和五十三年の四月に出ていることも付言しておきたい。これは、ヨーロッパ文化の起源と根幹を、精神史として究明した論考である。

英文学会

かねて長い間懸案となっていた標記学会が、文学部および短期大学部英文学科の卒業生、在学生、教員をその構成メンバーとして、昭和五十七年四月一日に、発会の運びとなった。早くも十一月には、会誌 Lilium の創刊号が発刊される段取りとなり、十一月十四日（日曜日）に、創立総会を兼ねた第一回の年次大会が、本学の大講義室で開催された。大会当日は、関本教授の「ことわざと修辞」と題する特別講演と、文学部三年次生の大津美文さんの英国研修の旅の報告、その他の行事が行われ、第一回の大会としてはまずまずの首尾でもって、成功裡に終ったのは、うれしい限りである。

今後の展望

以上述べてきたように、わが大学の英文学科が発足して今年で十七年有余を経過したが、その間、地の利・その他の条件に恵まれないためか、当学科で英語英文学を学ぼうと志す受験生の数は、例

年必ずしも押すな押すなの盛況ではなかった。しかもその多すぎるというわけではない数の受験生に対しても、決して無原則には合格の門を開くことなく、開設以来一貫して、一定以上の学力保持者のみに、入学の門を開いてきた。これはまことに苦しい自己規制であるが、この方針を永年頑固に固守しながら、今日に至った。そして前述した教育目標のもと、〝手づくりの教育〟という形容がふさわしい教育指導を続けてきたのである。この努力が、社会一般に広く評価を得たのか、ここ数年、受験者の数も次第に増勢に転じてきたので、従来行ってきた二次募集を、今年度から廃止してみた。つまり、昭和五十八年春の入学試験は、従来の二回からこれを一回に減じた。にもかかわらず、定員三十名に対して三十七名の入学者を、新一年次生として迎えることができた。

嬉しい時には嬉しい事が重なるもので、かの忌まわしい昭和四十九年のオイルショック以来、いささか低迷気味であった卒業生の就職状況も、今年（昭和五十八年）三月の卒業生についてみると、再び活況を取り戻して、三月十六日現在で、八十パーセントを越える就職決定率となっている。

総じて見るに、わが英文学科の将来にも明るい希望の灯が見えているという確信の中で、この稿をしたためることができるのは、開設当初から本学科に籍を置いてきた者として、まことに喜ばしい。

以上、広島文教女子大学英文学科の現況と展望の題のもとに、文学部英文学科の十七年有余の歩みをふりかえってみた。記述は極力正確を期したが、頼りとした記憶も、いかにも遠い昔のことであるために、時におぼろであり、集めた資料も極めて不十分であった。それゆえ、これは後の短期大学部英文学科の所の記述についても同じことがいえるが、上来述べてきたことの中に、後の歴史家を迷わせる記述があるいはあるやもしれぬことを大いに恐れている。この点に関し、大方のご叱正とご教示とがいただけるならば、まことに幸せである。

（文責・小川　登）

初等教育学科

初等教育学科（四年課程）は、昭和五十六年四月八日、第一期生四十六人の入学により第一歩を踏みしめた。文学部にこの学科が開設されたことにより、国文学科と英文学科による文学研究と、小学校の女教師養成をめざす初等教育学科の教育科学研究の総合的機能を持つに至った。多年の念願であった「文」と「教」を兼ねそなえて、広島文教女子大学の名にふさわしい大学となることができた。

設置計画と初年度の学生募集　初等教育学科設置の計画は、武田ミキ学長の胸中では随分早い時期から構想されていたようであるが、中島校舎の移転に始まる諸般の事情から、実際に設置計画書を文部省に提出したのは、昭和五十五年初夏の頃であった。大学の学科新設の最大の難関である文部省大学設置審議会による担当教員の資格審査の結果から、設置認可のおよその見通しが立ったのは、昭和五十五年の十二月も残り少なくなった頃であった。

過去の例によれば、文部省から設置の認可書が交付されるのは、一月末か二月上旬である。しかし、その頃には大部分の私立大学ではすでに入学試験が終了しているので、認可を受けた後に学生募集を始めていては、私たちが期待するような学生を集めることは極めて困難である。そこで初等教育学科に入学を希望する志願者には願書にその旨を記入させ、形式的には一応国文学科または英文学科の志願者として入学願書を提出させ、設置認可書が交付され次第、初等教育学科の志願者とすることにした。なお、万一認可されなかった場合には、合格者は国文学科または英文

学科に入学させることにして、昭和五十六年一月に入るや否や、直ちに各高等学校への広報活動を開始した。

しかし私たちは、この時点では「設置の認可はまだ受けていませんが、認可されることはほぼまちがいありません。」との歯切れの悪い説明しかできなかった。学長をはじめとして直接の関係者は、設置が認可されることに確信を持っていたが、高等学校側の反応は設置認可について、必ずしも十分に信頼しているとは受けとれなかった。従って、私たちにとっての最大の心配は、果たして定員を充足できるだけの十分な志願者が集まるかどうか、また、質の上で私たちが期待している学力を持った学生のみで定員を充足できるかどうかであった。

第一次募集の入学願書を一月三十一日に締め切ったとき、定員四十人に対して志願者は二百二十六人、また出身高等学校の調査書について、私たちが一応の基準と考えていた学力の者が、志願者の半数に達しているのを見て、私たちはひそかに胸をなでおろした。二月八、九日に実施した第一次入学試験の合格者の状態から、期待していた学力の者だけで定員充足の見通しは立っていたが、第二次募集でも七十五人の志願者があり、少数の合格者を発表した。

なお、昭和五十八年度は第二次募集を廃止したが、応募者四百九十七名となり、短時日のうちに質量とも安定してきている。

教育目標

初等教育学科は、国文学科、英文学科と並んで文学部の中に置かれた一学科であり、児童期の望ましい人間形成のための教育の方法を学問的に探究することを第一の目的としている。そのために、教育学、心理学、児童学の三つを教育課程の柱として構想し、その他に、小学校教諭一級普通免許を取得するための授業科目を開設するような設置計画書を文部省に提出して認可された。

初等教育学科の教育方針と具体的な教育計画、それに必要な施設・設備の充実計画は、開設に先立って、一年前の昭和五十五年四月から検討を始めた。児童期の人間形成に直接かかわりを持つのは、それぞれの児童の家庭と学校と

地域社会であるが、初等教育学科では、その中でも特に小学校教育と家庭教育のあり方についての関心を高め、指導力の向上をはかることにより、実践的能力のすぐれた小学校の女教師を育成することのできる教育組織と教育施設の整備をはかった。初等教育学科は文学部の中の一学科であり教育学部ではないので、「小学校教員養成課程」の看板を掲げることは許されなかったが、一般の教育学部以上に木目の細かい行き届いた教育をすることにより実質的には小学校のすぐれた女教師を養成することをめざしている。

教育上の特色　初等教育学科の教育目標を達成するために、学生の教育にあたり、特に重視している点と、そのための教育上の方策並びに特色の主なものを次に掲げる。

① 小学校教育への使命感を持った謙虚で優雅な、人間味あふれる女性の育成

初等教育学科が志向している「人間味あふれる女性」は、まず自分が指導するすべての子どもを等しく愛することができ、子どもの父母や家族に信頼され、同僚や先輩に真に愛される女性である。建学の精神として、日本女性古来の伝統美と現代的知性の調和を目指した私たちの学園こそは、このような女性の育成のための最適の環境であることを確信している。

② 専門的学識の充実と広い視野を持つ総合的な能力の育成

㈠準必修科目による小学校教師として必要な専門的学識の充実

小学校教諭一級普通免許状を取得するためには、卒業必修単位の他に小学校各教科の教材研究十六単位、教科専門科目十二単位、教育実習四単位計三十二単位を履修すればよいのであるが、本学では小学校教師としての専門的学識の充実をはかるために、この他にさらに十二単位を加えて、合計四十四単位を準必修科目として全員に履修させることにした。初等教育学科の研究の基盤である教育学、心理学および児童学の他に、準必修科目を含めて百七十四単位

以上を履修させることによって、小学校教師として必要な基礎的学識の充実をはかっているのである。

㈡専修コースによる個別指導の徹底と研究能力の育成

小学校教師は全教科担任を原則としているので、道徳、特別活動および国語、社会、算数など八教科のすべてにわたっての指導能力が必要であるが、その上に八教科の中のいずれか一教科については特に深く研修して、教育現場での研究推進者としての役割りを果たすことが要請されている。そのために、初等教育学科においては、次の九専修コースを設け、二年次からいずれかの専修コースに所属させる。一専修コースの学生数は、六ないし八人程度である。なお、これらの各コース毎の演習室が、教科教育学を担当している教授または助教授の研究室に隣接して設けられているので、学生は所属する教科についての専門的研究と、日常の人間的な接触を通して、行き届いた個別指導を受けることができる。

1　国語科教育
2　社会科教育
3　算数科教育
4　理科教育
5　音楽科教育
6　図画工作科教育
7　体育科教育
8　家庭科教育
9　学校教育（特別活動・道徳等の教育内容と指導法）

③ 小学校教育の現場との接触を密にしての実践的能力の育成

通常の教育実習は、四年次に四週間を予定しているが、それに先立って二年次には、小学校で一週間の教育観察実習を、三年次でも一週間の教育観察参加実習を実施し、実践的能力と教師としての使命感の育成をはかっている。

（文責・入江隆明）